

雲は、高度や形状などによって大きく 10 種類に分類されます。巻雲・巻層雲・巻積雲・高層雲・高積雲・層積雲・層雲・乱層雲・積雲・積乱雲の 10 種類で、これを「十種雲型」といいます。それだけなら簡単に暗記できるのですが、厄介なのは、それぞれの雲に多くの変種（バリエーション）が存在することです。「○○状△△雲」という表記をするものもあります。

たとえば、対流圏の最上層部に出現する「巻雲（すじ雲）」を見ても「尾曳（おびき）巻雲」「鉤状（かぎじょう）巻雲」「濃密巻雲」「変化巻雲」など多くの変種があって、中には見分けが難しいものも含まれます。

対流圏下層～中層に出現する「積雲（わた雲）」も変種が多いです。これは積雲の生成原因のちがいや、一日の変化（成長）によって名称も変わることが原因です。成因による分類では「晴天積雲」「雨積雲」「球状積雲」「片積雲」などが存在します。また成長による名称の変化としては「立ち上がり積雲」「雄大積雲」などがあります。「雄大積雲」は俗に「入道雲」と呼ばれ、晴れた夏の日に晴天積雲が上方に発達したものです。更に県界面まで発達したものを「積乱雲（雷雲）」と呼びます。積雲の仲間は「出世雲」と言えるでしょう。

「雄大積雲」には「塔状雄大積雲」という変種があります。積雲が上層に向かって発達する時に、いわゆる「大気の安定層」を突破する必要があります。その時、積雲塊の一部が長細く伸びることがあります。それが「塔状雄大積雲」です。「変種」というより「一時的な状態」と言ったほうが合っています。塔状部はそのまま発達することもあれば、しぼんでしまうこともあります。それを繰り返しながら「一人前の入道雲」に成長していくのです。（2023 年 7 月下旬／群馬県藤岡市郊外）

